

「高齢者の生きがい感」の視点から見た 「孫育て応援講座」に関する一考察

—H県S町の事例を通して—

楊 丹

(2021年10月5日受理)

Evaluation of a “Grandchild Raising Support Course”:
Providing Meaning of Life for the Elderly

Dan Yang

Abstract: In this paper, we examine how a “feeling of motivation for the elderly” was generated in a “grandchild care support course” through the case of S town in H prefecture. We also develop insights into the specific contents of “grandchild care support activities”. We conducted an interview survey with the organizer of a “Grandchild Raising Support Course” and obtained the following insights: First, in the “Grandchild Raising Support Course,” it was found that elderly people had an awareness that they were useful to their families and other people and had positive feelings. These were supported by a sense of self-affirmation, based on their achievements and improvements. Second, the contents of the “grandchild rearing support activities” were necessary because they provided “a sense of purpose of life for the elderly”. They felt able to support the child-rearing activities of the working generation, and engage in activities that make children happy. These activities gave them guidance and broadened their previous ways of thinking.

Key words: Elderly people, grandchild raising support activities,
grandchild raising support lectures, feelings of purpose for the elderly

キーワード：高齢者、孫育て支援活動、孫育て応援講座、高齢者の生きがい感

I. 問題の所在と研究の目的

日本においては、急速に高齢化を迎え、高齢者の生きがい注目されている。老人福祉法（1963）第2条には、「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として、かつ、豊富な知識と経験を有する者と

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：鈴木由美子（主任指導教員）、伊藤圭子、
児玉真樹子、宮里智恵

して敬愛されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする。」とされ、社会が高齢者を敬愛し、生きがい感のもてる社会を保障する必要性が述べられている。それとともに、高齢社会対策基本法（1995）総則第5条においては、「国民は、高齢化の進展に伴う経済社会の変化についての理解を深め、及び相互の連帯を一層強めるとともに、自らの高齢期において健やかで充実した生活を営むことができることとなるよう努めるものとする。」とされ、充実した高齢期を過ごすことができるように高齢者自らが努力する必要性が指摘されている。このような方向

性は、「平成17年版高齢社会白書」(内閣府, 2005)においても見られ、この白書では、「高齢者の社会参加と生きがいづくり」という項目が立てられており、高齢者の生きがい感を育む活動として社会参加活動が促進されている様子がうかがえる。

高齢者の生きがい感に関する研究としては、長谷川ら(2001)、野村(2005)、近藤ら(2003)があげられる。長谷川ら(2001)は高齢者の生きがい感とその関連要因を検討し、生きがいとは、「『あなたの生きがいは何か』と尋ねられた時に、その人が過去の経験、現在の出来事、未来のイメージといった『『生きがい』の対象』を心に思い浮かべ、同時に伴って湧いてくる自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、存在感、主動感といった種々の感情、つまり『『生きがい』の対象に伴う感情』を統合した自己の心の働きである。」(151頁)と指摘した。この定義の特徴は、高齢者の生きがい感の対象に時間軸を組み入れたことにある。また、野村(2005)は、高齢者の生きがい感の概念の用法について分析し、高齢者の生きがい感を「高齢者が生きるために見出す意味や目的、価値であり、生きることに對する内省的で肯定的な感情の創出により実感される」(63頁)ものと指摘した。この定義の特徴は、高齢者の生きがい感を自己の内省による肯定的感情によって実感するものとしたことにある。長谷川ら(2001)、野村(2005)が自己との関係で高齢者の生きがい感を捉えているのに対し、近藤ら(2003)は、高齢者の生きがい感について、「毎日の生活のなかでなに事にも目的をもって意欲的であり、自分は家族や人の役に立つ存在であり、自分がいなければとの自覚をもって生きていく張り合い意識である。さらになにかを達成した、少しでも向上した、人に認めてもらっていると思えるときにも、もてる意識であるといえる。」(99頁)とし、他者との関係性の中でもつ意識であるとした。本論では、「平成17年版高齢社会白書」(内閣府, 2005)において高齢者の社会参加活動が重視されていることに着目し、他者との関係性に注目している近藤ら(2003)に従って、「高齢者の生きがい感」を「家族や人の役に立っているという自覚や、自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情」と定義する。

近年、「高齢者の生きがい感」を育む活動として孫世代の子どもの交流が着目されている(村山ら, 2013; 高橋ら, 2015)。その背景として次の2点があげられる。1点目は、「長寿社会における生涯学習の在り方について」(文部科学省, 2012)において指摘されているように、児童虐待や育児不安が社会問題化している今日、子育て経験者としての祖父母世代の教育

力が着目され、世代間交流が進められていることである。2点目は、子育て世代の親を支援する施策として、これまで行われてきた母親、父親への子育て支援に加えて、祖父母との同居・近居による子育て支援が進められつつあることである(内閣府, 2007, 2015)。このように、一方では長寿社会における高齢者の生きがい感の視点から、他方では子育てをする親のサポートの視点から、高齢者による孫育て活動が注目されてきているのである。

高齢者による孫育て活動に着目した研究には、森田ら(2017)、山崎ら(2004)、廣瀬ら(2009)等があげられる。森田ら(2017)は、学童保育における高齢者と子どもの交流に着目し、子どもとの交流が高齢者の生きがい感を実感しやすくすることを明らかにした。山崎ら(2004)は、祖父母と孫との関わりが日々の生活に張り合いをもたらし、祖父母が生きがい感を感じやすくなり、精神的充足感を高めていると指摘した。廣瀬ら(2009)は、独居高齢者の生きがい感に関して、孫育て活動が高齢者の喜びや期待の源泉になることを明らかにした。このように、高齢者による孫育て活動に着目した研究は多岐に渡る。

ここで考えなければならないことは、孫育て活動という言葉の曖昧さである。対象とする子どもとの関係性一つを取り上げても、自分の孫なのか、日常的にどの程度の関わりがあるのかなど多様であり、限定しにくいところがある。そこで本研究では関わりやの程度に着目し、孫育て活動の内容を3つに分類することにした。第1に、同居・近居により日常的に自分の孫と関わる高齢者を支援する「孫育て支援活動」である。第2に、週1回程度の定期的な交流会で自分の孫以外の孫世代の子どもと関わる「孫育て交流活動」である。第3に、年に数回程度開催されるイベントで自分の孫以外の孫世代の子どもと関わる「孫育てイベント活動」である。本論では第1の「孫育て支援活動」を取り上げる。

本論では特に、H県S町で行われている孫育て応援講座(以下、「孫育て応援講座」と記す)を取り上げる。H県S町では、後に詳しく述べるように、同居・近居による空き家問題の解消や子育て支援の施策を積極的に推進している。「孫育て応援講座」は、同居・近居によって日常的に自分の孫の世話をする高齢者に、知識や技術を身につけることを通して、自信をもって自分の孫に関わることができるようになることを目指して開設されたものである。「孫育て応援講座」において行われている活動の様子ならびに活動を通して参加した高齢者にどのような生きがい感が生じているかを検討することで「孫育て支援活動」の実際を把

握することにする。を通して、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育て支援活動」への示唆を得ることにする。

II. 研究方法

1. 事例検討—H県S町「孫育て応援講座」

本論では、日常的に自分の孫の世話をする高齢者を支援する講座として開設された「孫育て応援講座」を事例として取り上げ検討することにする。「孫育て応援講座」に参加する人数は表Ⅰからわかるように6-7名と少なく、また同じ人が継続して参加するとは限らない。「高齢者の生きがい感」は中長期的なスパンでみとる必要があるため、本論では「孫育て応援講座」の参加者ではなく、運営者に焦点を当てることにした。「孫育て応援講座」の運営者であるA氏は、10年間に渡って講座運営に携わり、延べ60人以上の講座受講者と関わりながら、この講座で高齢者が何を学び、何を得たか、確認しながら運営している。多くの参加者の生の声を聴いたり、参加者の反応を確かめたりできる立場のA氏から聞き取ることで、「孫育て応援講座」において「高齢者の生きがい感」がどのように生じているか、具体的に検討できると考えた。

(1) 「孫育て応援講座」が開設された背景

「一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策—成長と分配の好循環の形成に向けて—」（内閣府、2015）による祖父母世代と親世代の「近居」、「同居」の施策が進められ、自分たちの父母からの支援を受けることによって、働く世代の子育てと共働きの両立を促進する施策が注目されるようになってきた。H県においては、これまでH県版ネウボラ、イクボス支援制度、子育て応援イクちゃんサービスといった子育て支援施策が積極的に進められてきた。その一環として、地域における「イクじい」、「イクばあ」の孫育てを応援する施策が進められることになった。具体的には、じいじ・ばあばのための孫育て応援ブックの発行、三世帯同居及び近居支援の実施があげられるが、本論では三世帯同居及び近居支援施策に着目する。本論で取り上げたS町は、三世帯同居の減少（1990年11.9%、2010年4.2%）、核家族及び共働き家庭の増加に伴い、保育施設の不足と高齢者の介護や空き家問題が課題になっていた。S町は、子育てや介護を支え合うことにより、お互いの負担を軽減し、心豊かに生活することのできる三世帯同居・近居を推奨することとした。例えば、S町では住宅支援事業として、三世帯（親世帯・子世帯・孫）での同居や近居を始める人には、最高200万円の補助金を交付している。この「三

世帯同居・近居引越支援事業」は子育て支援とも関わるものであり、三世帯での子育てを推進するものとして、「孫育て応援講座」が開設された。

(2) 「孫育て応援講座」の概要

「孫育て応援講座」は、祖父母世代による子育て支援についての知識を学び、祖父母世代の生きがいづくりに繋げることをねらった地域の子育て支援の一環として開設された。具体的な運用について見てみると、2019年は2回で構成され、1回目は2019年10月31日（木）、2回目は2019年11月7日（木）、毎回10:00～15:00の5時間であった。12:00～13:00は参加者と講師が一緒にお昼を食べる時間であった。講座の対象者は、自分の孫がいる人、地域の子どもたちに関わるボランティア等で、参加者の募集は、S公民館が発行している広報や、S町のホームページなどにより行われた。講座の講師は5名であった。2019年における講座の参加者は、1回目6名、2回目6名であった。2019年の場合、参加者全員が、自分の孫がいる人で、自分の孫の世話をするための知識や技術を得るために講座に参加していた。

(3) 「孫育て応援講座」の活動日程と活動内容

「孫育て応援講座」の活動日程と活動内容は表Ⅰの通りであった。講師の属性は表Ⅱの通りである。

(4) 講座の様子

論者は、「孫育て応援講座」に参加する許可を得て、2回の「孫育て応援講座」に参加し、講座の様子を観察・記録した。以下、講座の様子を述べていく。

「孫育て応援講座」の1回目は、主に講義の形で行われた。表Ⅰの活動1～活動5について説明する。活動1は、A氏による「賢く、元気な、人気者の祖父母になろう～プラチナ世代の社会参加と地域の子育て支援のために～」についての講話であった。その主な内容は孫育ての背景、現状、現代の子育て事情、変わった子ども遊び、大人の役割、地域世代間交流事例という6点であった。活動2は、B氏による「子どもの発達」についての講話であった。その主な内容は、「人生のライフスタイル」、「子どもの発達（身長体重の変化、脳の発達、子どもの育ち）」、「祖父母世代の私たちができること」という3点であった。活動3は、C氏による「食育が必要なのは子どもだけ？」についての講話であった。その主な内容は、「食育とは」、「お腹のすくしくみ」、「離乳食」、「嘔むことの効果」、「昨今の子育て事情」という5点であった。活動4は、D氏による「葉っぱのスタンプでエコバックを作ろう」についての説明と実習であった。その主な内容は葉の観察方法、エコバック作りという2点であった。葉を用いたスタンプで装飾を行い、植物のもつ造形の

表Ⅰ 活動日程と活動内容

| 回数 | 日時 | 参加人数 | 講師 | 活動内容 | |
|-----|---------------------------------------|-----------------|----|------|---|
| 第1回 | 2019年10月 31日(木) 10:00~ 15:00 | 祖父母世代 6人(女性) | A氏 | 活動1 | 孫育て事情と祖父母の役割について |
| | | | B氏 | 活動2 | 子どもの心と体について |
| | | | C氏 | 活動3 | 食育と健康 孫を預かる際の注意点 |
| | | | D氏 | 活動4 | 葉っぱ遊び、外遊び |
| | | | E氏 | 活動5 | 伝承遊び、簡単クラフト作り |
| 第2回 | 2019年11月 7日(木) 10:00~ 15:00 | 祖父母世代 7人(女性) | A氏 | 活動6 | 孫育て検定研修 子育て、孫育てについて、参加者の知識 を確かめるための腕試しをする 合格証書の授与式 |
| | | | E氏 | 活動7 | おもちゃ作り |
| | | | D氏 | 活動8 | 枯葉の遊び |
| | | | A氏 | 活動9 | 孫育てから始める地域デビュー法 参加者との意見交換会 地域の場紹介 |

表Ⅱ 講師の属性

| 講師 | 年齢 | 性別 | 属性 |
|----|-----|----|------------------------|
| A氏 | 70代 | 男 | 一般社団法人孫育て検定協会代表理事 |
| B氏 | 50代 | 女 | 元公立保育所所長，元保育士，地域の相談員 |
| C氏 | 50代 | 女 | 日本栄養士所属，管理栄養士，食育アドバイザー |
| D氏 | 70代 | 女 | 保育士 |
| E氏 | 60代 | 男 | 日本余暇会H県支部事務局長 |

美しさや複雑さを生かしたオリジナルなエコバックを製作した。活動5は、E氏による「孫に伝えたい伝承遊び」についての講話であった。その主な内容は「伝承遊びの代表例」、「『子どもに遊びを教える達人』の養成講座事例（被災地応援・子ども遊び寺子屋塾）」、「簡単な工作体験のススメ」という3点であった。「孫育て応援講座」の2回目も、主に講義の形で行われた。表Ⅰの活動6～活動9について説明する。活動6は、孫育て検定であった。テストの内容は配布された『孫育て検定認定教本』に基づいたもので、「保育」、「食育」、「時事」、「遊育」に関する4側面であった。テストが終わった後、A氏はテストの内容について解説し、参加者に「孫育て検定修了証」を配付した。活動7は、おもちゃ作りであった。E氏は、風船ボールの作り方を紹介し、参加者は各自風船ボールを作成した。活動8は、枯葉の遊びであった。D氏は枯葉の形によって、さまざまな枯葉の遊び方を説明し、孫が自然を感じられるような遊びを紹介した。活動9は、参加者との意見交換会であった。参加者はそれぞれの感想を発表した。また、A氏は交流のなかで、地域の孫育ての場を紹介し、自分の孫だけではなく、地域の孫世代の子どもに関わることの大切さについても話した。

2. 研究方法

(1) 対象者

前述したように、「孫育て応援講座」の運営者であるA氏をインタビューの対象とした。A氏は一般社団法人孫育て検定協会代表理事を務めており、「孫育て応援講座」には10年関わっている。「孫育て応援講座」の他にも、H県で約50ヶ所、約150回孫育て講座を担当した経験を持つ。中長期的な視野で、「孫育て応援講座」を通して「高齢者の生きがい感」がどのように生じているか把握できる立場にあることから、A氏をインタビュー調査の対象とした。

(2) インタビュー質問項目

本論で使用するインタビューの質問項目は、60代の男女計3名を対象として実施した予備調査の結果に基づいて作成した。予備調査のアンケートの質問項目は、田淵ら(2012)による「高齢者における短縮版 Generativity 尺度」(20項目)、村山ら(2014)による「世代間のふれ合いにともなう感情尺度」(15項目)に、楊(2020)による世代間交流が高齢者に与える影響に関する知見を参考にして作成した5項目を加えた40項目とした。アンケート結果を参考にして、インタビュー調査項目(12項目)を作成し、予備調査としてインタビュー調査を行った。これらの予備調査の結果に基づいて、本調査のアンケート質問項目(40項目)：

自分の孫がいる場合は60項目)、インタビュー調査の質問項目(11項目)を作成した。本論では、このうちのインタビュー調査の結果を取り上げる。アンケート調査の結果については別稿で取り上げる。

本調査のインタビューの質問項目は、以下の通りである。①②はA氏個人に関する質問、③④は参加した高齢者の様子に関する質問、⑤⑥⑦⑧はA氏が講座での高齢者との関わりによって学んだことや気づいたこと、⑨⑩⑪は今後の講座への展望や意見であった。

- ①以前に教育に関する仕事をしたことがありますか。
- ②「孫育て応援講座」を始めたきっかけは何ですか。担当者になったきっかけは何ですか。
- ③参加者は孫育て応援講座に参加することを通して、参加する前と参加した後でどのような変容がありましたか。
- ④参加した高齢者とのふれあいを見て、「これがいいな」「これが面白いな」と思ったエピソードがありますか。
- ⑤「孫育て応援講座」でいろいろな活動を行うことを通して、新しく分かったことや気づいたことがありますか。
- ⑥「孫育て応援講座」を担当して良かったと思うことは何ですか。一番印象に残ったことは何ですか。困ったことがありましたか。
- ⑦孫世代を育てる活動を通して、生きがいを得られたと感じたことがありますか。
- ⑧あなた自身は孫世代を育てる活動を通して、自分の思いや気持ち、家族のことを「孫育て応援講座」の参加者に話したい・聞いてほしいと思いましたか。
- ⑨もっと「孫育て応援講座」が充実するためには、どのような支援や改善が必要だと思いますか。
- ⑩「孫育て応援講座」以外に、地域の子どもの豊かな成長のために、もし自分の力を貢献することができれば、何をやりたいですか。どこまでやろうと思いますか。
- ⑪何か言い残したことがあれば、ご自由にお話しください。

(3) 手続き

COVID-19感染拡大防止の観点から、インタビューは会議用アプリを使って遠隔で行った。A氏の承諾を得てインタビューの録画とICレコーダーによる録音を行い、文字起こししたインタビュー内容を分析対象とした。インタビューを行ったのは2021年3月6日(土)13:00~14:20、所要時間は、約80分であった。

(4) 倫理的配慮

広島大学大学院人間社会科学部教育工学系プログラム倫理審査合同委員会に申請し、承認されている。

Ⅲ. 結果と考察

ICレコーダーに録音したインタビュー内容を、質問と回答に整理し、さらに回答を質問と整合がとれる内容に整理した。質問と関係のない内容は今回の分析対象から外した。質問と整合がとれる内容に整理した回答は55個のまとまりに分類された。55個のまとまりを、意味のまとまりごとに分類した。分類に当たっては、前述した田淵ら(2012)村山ら(2014)を参考にして設定したカテゴリーを提示し、大学院学生2名が提示されたカテゴリーに独立して分類し、その後、相談しながら一致させ、表Ⅲのように分類した。この分類から、「孫育て応援講座」に関わる内容として「講座そのものの価値」に分類された22個を対象とすることとした。「孫育て応援講座」の活動内容に直接関係しない、講師の気持ち、A氏自身が講座を充実するための改善方法、新しい子育ての場を作りたい気持ち等個人の経験が含まれていたため、研究者1名、論者を含む大学院学生3名で協議して、まずそれらを除外し、分類する対象を「孫育て応援講座」の活動内容に直接関係する内容に限定した。その結果、11個に限定された。限定された11個について、先に定義した「高齢者の生きがい感」の視点、つまり「家族や人の役に立っているという自覚や、自己の達成・向上に基づい

表Ⅲ 全体カテゴリー分類表

| 内容 | 数 |
|-------------|----|
| 講座そのものの価値 | 22 |
| 親と異なる祖父母の価値 | 6 |
| 地域への貢献 | 6 |
| 祖父母の知恵の伝承 | 3 |
| 子どもへの理解 | 3 |
| その他 | 15 |

表Ⅳ 講座そのものの価値に関するカテゴリー分類表

| 内容 | 数 |
|--------------------------------|---|
| 家族や人の役に立っているという自覚 | 3 |
| 自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情 | 3 |
| 社会的な評価を受けること | 2 |
| 世代を超えたコミュニケーション、生きざまの共有 | 3 |

た自己肯定感に支えられた意欲的な感情」の視点から上記の4名で分類した(表Ⅳ)。なお、インタビュー内容の記述にあたっては、紙幅の関係で質問と関係のある内容に厳選するとともに個人が特定されないように修正している。下線は論者による。

(1) 家族や人の役に立っているという自覚

「そこには高齢者の力がある。力を引き出すことによって、高齢者の生きがいも出てきてるし、子どもたちも助かっているし、今度はその子育てをしているお父さん・お母さんもすごく助かると思う。全員がみんながwin-winの関係になる。すごく良い政策と思う。」(質問項目③の回答)

「高齢者は生きがいを感じてると思います。自分も役に立ちたいと思っている高齢者が多いです。何をしてよいかわからない高齢者も多いです。そこで自分も講座に参加して、いろいろ学んだことによって自信をもって、今度はいろんな子どもたちと遊ぶことや体験ができていいなと思って。」(質問項目③の回答)

「実際に試してみるというか、実際に学んだおじいちゃん、おばあちゃんたちがそういう現場に行って力試しをするという事をよくやったんだけど、その時に学んだことが非常に役に立つというか、子どもたちが、本当に喜んで、それはすごくほほえましいというか、近くに寄ってきてすごく楽しそうでした。」(質問項目④の回答)

下線で示したように、「孫育て応援講座」において家族や人の役に立ったと自覚するのは、主に2つの点だといえる。第1に、働く親世代の子育てを応援することに役立つことである。「(高齢者の)力を引き出すことによって、高齢者の生きがいも出てきてるし、子どもたちも助かっているし、今度はその子育てをしているお父さん・お母さんもすごく助かると思う」という言葉に見られるように、高齢者が自分の力を使うことで働く世代の親の子育てに役立っている実感をもつことがあげられる。第2に、役に立ちたいが何をしたらよいかわからなかった高齢者が、「孫育て応援講座」で学んだことを実際にやってみたら、子どもが喜んでくれたことで、自分が役に立つことを実感したことがある。「役に立ちたいと思っている高齢者が多い」が、「何をしてよいかわからない高齢者も多い」。そういう悩みを持つ高齢者がこの講座に参加することで、「いろいろ学んだことによって自信をもって」、「いろんな子どもたちと遊ぶことや体験ができて」、自分が役に立つ実感を得ていると思われる。講座で学んだことを

やってみたら、「子どもたちが、本当に喜んで、それはすごくほほえましい」ことであり、また「(子どもたちが)近くに寄ってきてすごく楽しそうな」様子を見たりすることから、講座で学ぶことが高齢者の自信につながり、子どもたちの喜ぶ顔を見ることで、役に立っている実感が得られたと考えられる。

(2) 自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情

「実際、遊ぶ現場をイベント企画してみて、そこに来ている子どもたちと今度それを教えるおじいちゃん、おばあちゃんたちがすごく元気、楽しそうだったという事、両方ともWin-Winの関係だったという事。」(質問項目②の回答)

「世代間ギャップがよくわかったという事です。今まで自分がやってきたことは正しいと思っていたけど、参加して、いろんな方に話を聞いて、ちょっと間違っていたということがよく理解できてよかったという喜ばれることが多いです。」(質問項目③の回答)

「遊びの方法も一緒にレクチャーするので、すごく遊びのネタが増えたという事があり、普通一時間遊ばばいっぱいいいんだけど、これなら半日ぐらい遊べると喜ばれるというのがあります。保育、保育をやる仲間が増えたという事です。遊び方や保育の知識などです。それが深まったという事がありました。子育てというか、孫の応援に自信をもって取り組むことができるなという自信をもてたことです。」(質問項目③の回答)

下線で示したように、「孫育て応援講座」において、自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情を持つのは、主に3つの点だといえる。第1に、子どもたちと遊ぶことを通して、子どもも高齢者も元気になるということである。子どもたちと遊んでいる現場では、子どもたちも楽しそうだが、「それを教えるおじいちゃん、おばあちゃんたちがすごく元気、楽しそうだった」様子で、「両方ともWin-Winの関係だった」とされる。相手を楽しませることで自分も楽しい気持ちになることが、高齢者を笑顔にし、自己肯定感を高め、生きる意欲が高揚することに繋がっていると思われる。第2に、「孫育て応援講座」に参加することを通して、世代の異なる人々と出会い、理解し合う経験をすることが日常に繋がり、自分の生活において誤解していたことや思いこんでいたことを考え直す機会になったことである。「世代間ギャッ

ブがよくわかった」、「今まで自分がやってきたことは正しいと思っていたけど、参加して、いろんな方に話を聞いて、ちょっとこれ間違っていたというよく理解できてよかったと喜ばれることが多い」という言葉からわかるように、考え方の幅が広がったと言えるかもしれない。第3に、講座に参加することで子どもたちとの遊びのネタが増加することにより、孫と関わることへの自信が高まったことがあげられる。講座を通して遊びの方法を具体的に学ぶことで、「遊びのネタが増え」、「普通一時間遊べばいっぱいいっぱいなんだけど、これなら半日ぐらいい遊べる」という言葉からわかるように、遊び方や保育の知識が増えて、自信をもって孫と関わるができるようになったと考えられる。

IV. 結論

本論の目的は、「孫育て応援講座」を取り上げて、「高齢者の生きがい感」がどのように生じているのかが検討し、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育て支援活動」の具体的な内容について示唆を得ることであった。

今回、「孫育て応援講座」でも、近藤ら（2003）が述べたように、家族や人の役に立っているという自覚が見られたが、それは具体的には働く親世代の子育てを応援すること、遊びや体験活動を行うことで子どもが喜んでくれたことによるものであった。自己の達成・向上に基づいた自己肯定感に支えられた意欲的な感情を持つことも見られたが、それは具体的には子どもたちと遊ぶことで高齢者自身が元気になったこと、考え方の幅が広がったこと、孫と関わることへの自信が高まったことであった。

以上から、「高齢者の生きがい感」という視点から見て必要な「孫育て支援活動」の具体的な内容として、働く世代の子育てを支援することに役立つ内容、子どもが喜ぶような遊びや体験活動の指導、今までの考え方を広げるような活動があげられた。

また、「講座そのものの価値」に分離されたカテゴリーのうち、「社会的評価を受けること」と「世代を超えたコミュニケーション、生きざまの共有」は、今回は「高齢者の生きがい感」としては取り上げなかったが、これらのカテゴリーに分類された意見の中には、高齢者による「孫育て支援活動」が社会的に認められることの意義や、高齢者が自分のそれまでの生きざまを肯定的に理解できることの大切さを指摘する意見も見られた。これらについての検討は今後の課題としたい。

今後は、今回取り上げなかった「孫育て交流活動」

や「孫育てイベント活動」を取り上げて、そこで生じる「高齢者の生きがい感」はどのようなものか検討していくことにしたい。

【引用文献】

- 近藤勉・鎌田次郎(2003)「高齢者向け生きがい感スケール(K-I式)の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学』第43巻第2号, 93-101頁。
- 高橋知也・村山幸子・野中久美子・安永正史・藤原佳典(2015)「多世代が参加する子育てサロンの実態に関する一研究」『日本世代間交流学会誌』第5巻第1号, 57-64頁。
- 田淵恵・中川威・権藤恭之・小森昌彦(2012)「高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『厚生指針』第59巻第3号, 1-7頁。
- 内閣府(2005)「平成17年版高齢社会白書第1章第3節高齢者と子育て」2005年。
<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2005/zenbun/17index.html> (2021年3月10日取得)
- 内閣府(2007)「平成19年版国民生活白書第1章第3節家族のつながりの再構築に向けた新たな動き」
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/index.html (2021年9月2日取得)
- 内閣府(2015)「一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策—成長と分配の好循環の形成に向けて—」
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusou/katsuyaku/kinkyu_taisaku/hontai.pdf (2021年6月15日取得)
- 長谷川明弘・藤原佳典・星旦二(2001)「高齢者の『生きがい』とその関連要因についての文献的考察—生きがい・幸福感との関連を中心に—」『総合都市研究』第75巻, 147-170頁。
- 野村千文(2005)「『高齢者の生きがい』の概念分析」『日本看護科学会誌』第25巻第3号, 61-66頁。
- 廣瀬春次・杉山沙耶花・武内あや・馬場崎未絵(2009)「独居高齢者の生きがいに関する研究」『山口県立大学学術情報』第2号, 26-31頁。
- 村山陽・竹内瑠美・大場宏美・安永正史・倉岡正高・野中久美子・藤原佳典(2013)「世代間交流事業に対する社会的関心とその現状：新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から」『日本公衆衛生雑誌』第60巻第3号, 138-145頁。
- 村山陽・高橋知也・村山幸子・二宮知康・竹内瑠美・

- 鈴木宏幸・野中久美子・深谷太郎・谷口優・西真理子・新開省二・藤原佳典（2014）「高齢者における『世代間のふれ合いにともなう感情尺度』作成の試み：高齢者の心身の健康との関連」『厚生指標』第61巻第13号，1-8頁。
- 森田久美子・青木利江子・小林美奈子・山本晴美・呂曉衛・永嶺仁美・佐々木明子（2017）「全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実施状況と実施に関わる要因」『日本世代間交流学会誌』第6巻第1号，27-36頁。
- 文部科学省（2012）「長寿社会における生涯学習の在り方について第2章第7節世代間交流の促進」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf（2020年5月30日取得）
- 山崎美佐子・角間陽子・草野篤子（2004）「異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から—」『信州大学教育学部紀要』第112巻，99-110頁。
- 楊丹（2020）「世代間交流による子育て支援に関する一考察：H市の事例を中心に」『教育学研究紀要』第61巻第13号，162-167頁。
- 注：H県及びH県S町の取り組みについては以下を参照。
- H県子育て応援団～孫育て！じいじ・ばあば～
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/248/mago.html>（2021年7月4日取得）
- H県S町ホームページ（2020）http://www.town.saka.lg.jp/kurashi/images/sansedai-goannai-5020401_1.pdf（2020年4月28日取得）